

タイヤモニタ機能を追加

富士通グループのトランストロン（加藤祐三社長、横浜市港北区）はネットワーク型デジタルタコグラフ「DTS-C1」シリーズ専用クラウドサービス「ITP Web Service」の標準機能として、オレンジジャパン（時本真一社長、東京都新宿区）のタイヤ・プレッシャー・モニタリング・システム（TPMS）を追加する。タイヤの空気圧、温度を常時監視するシステムを導入することで、リアルタイムで事務所からの確認が可能となり、安全性や燃費向上に役立つ。

30日から提供開始する予定で、オレンジジャパンのTPMS「TP Checker」を活用。タイヤの中に装着した各センサーから空気圧と温度のデータを受信機に送ることで、ドライバーは運転席のモニターでタイヤの状態を常に確認できる。この結果①タイヤ異常の早期発見②点検・整備時間の短縮③燃費効率の向上——などが可能になるとともに、導入費用は掛から

話せるデジタコ■DTS-C1

トランストロン



ず、クラウドサービスの既存利用者もすぐに利用できるといふメリットがある。TPMSとの連携機能をITP Web Serviceに加えることで、ドライバーだけでなく事務所側からもタイヤの状態を即座に確認できる。従来は一過性だったデータも、履歴として事務所側で管理できるようになったため、タイヤ異常の予兆検知や、問題発生時に、履歴の参照による

空気圧・温度を常時監視

リアルタイムで事務所からの確認が可能で、安全性や燃費向上に役立つ

適切な対応も行える。情報機器事業推進部の酒井健二氏は「最近では、業界全体が安全を強く意識しているという印象で、ユーザーからも要望の声があった」と開発の経緯を説明。「例えば、ドライバーがタイヤ異常を発見できても、近くの整備工場の場所が分からない時がある。その場合、事務所から知らせることができると、整備工場への連絡も先回りして行え、スムーズな対応が可能だ」と強調する。

6月には、音声通話オプションの提供を開始したが、既に複数社の導入が決まっている。酒井氏は「『話せるデジタコ』という表現通りで利点が伝わりやすく、低価格なので事業者の反響も大きい。これからも経済、安全面で事業者に役立つ機能を追加していく」と話し、今後、年2回の割合で標準機能を増やしていく考え。サービスの強化を図り、利便・安全性の両面からユーザーを支えていく。（土屋 太朗）